2010 年 8 月

博物館は何故モノを持つのか

海の博物館　石原義剛

超能力を秘めていると考えられる人間の脳であるが、さすがの脳でも限界を持っている。一つは死であり、それは累積された能の記憶が保存不可能であることを意味する。一つは忘却である。人間は記憶を保存しようと、多くの努力を費やして来た。成功した部分もあるが、大半は亡失してしまった。

記憶が亡失することは人間にとって悪い事ばかりではない。人間個人の場合、もし記憶が全部残って蓄積していったら、狂い死にするのではないか。忘れるからこそ人間は生きつづけられるに違いない。人類の場合どうだろうか。人類は「記憶」を踏まえながら『保守』と『革新』を選択しつつ、新しい方向を辿っている。その道筋は直線的ではない。

何故、記憶を保存しようと、人間は志向するのであろうか。

だれでもが記念写真を持っている。父親の肖像写真、娘の誕生時の写真、卒業写真。卒業証書を残している人は多いし、小学校の工作時間に作った作品も残っている。何故残すのかと問われても、答えようがない。ただ残しておきたいだけである。

すでに 40 年も、モノを集め続けてきたが、持ち主に「博物館に残すからください」というと、ほぼどの人もモノをくれた。懐かしそうに多くを語る人もいれば、黙ってくれる人もある。1992 年に浦村へ全面移転して以降に貰った資料・モノの数は 4 万点近く、呉れる人が充実した収蔵庫に安心してモノを任せてくれる気持ちが根底にあることが理解される。

使った人はそのモノの記憶を深く持ち続けているのである。

モノには多くの「思い」が入っている。漁師が漁具・モノを使って獲物を捕ったときの喜び、厳しい労働や長い待ち時間に耐える忍耐、得た対価、そのお金で買った子どもの晴れ着。学校を出て就職しやがて結婚した子に孫が出来た嬉しさ。家も新築できた。それらの記憶はすべてモノとして形を残している。

生き物としての人類の逃れられぬ命運は、老化であり死である。人類は死に代わって新しい生命を誕生させる能力を、一方で、秘めている。順調に推移すれば、親から子へ記憶が継承される筈であるが、そう簡単ではない。

これまで人間はどんな記憶保存法を講じてきたのか。

言葉で残し伝える。記号で残し伝える。文字で残し伝える。モノで残し伝える。近年になって音声、映像で残し伝えることが加わった。

モノで残し伝える、ことを考えて見たい。文字や音声・映像は伝える人の「意思や感情」を含み、多くの場合理解できるように表わしていることがある。モノはただそれが在るだけでは、「意思や感情」を表わさない。それにもかかわらずモノが何故か意思を持っているように思えるのはどうしてだろうか。

たぶんモノの成立にあたって、人間が深くかかわっていることに由来するのであろう。どんなモノでも、モノは自然が人間の手で加工されて形をなす。そこには人間の強い意志の発露があるわけである。（盆栽はモノである）

ではモノは何故作られるのか。原始時代に食糧を得る手段を手にいれるため工夫されたことにはじまったモノは、次第に用途を広げ、生きて行く上での労苦や苦痛を取り除くためのモノになった。今日では「便利さ」を得る手段の確保を超えて、「快楽」を手に入れる手段にまで拡大されている。

モノは古くは使う人の手で作られた。そのモノを使って人は直接、生産をした。その後、モノを作る専門の人が出るようになった。その頃はまだ作り手は職人といわれ、モノは手作りだった。

モノは今日ではビルド＆スクラップされている。今日のモノはなにかを行う手段から逸脱して、売られ買われることを目的としたモノになっている。

博物館が収集保存しているモノは現在のところ、機械によって大量生産されるモノは対象になっていない。その違いはどこにあるのだろうか。なにが違うのだろうか。